

《講演会報告1》 2005年1月25日(火)

中欧における日本研究の現状と課題

ダヴィッド・ラブス*

概 要

中欧における日本研究は、方法論の多様化の段階を経験しています。それぞれの国には、文化と政治の伝統が働いて、共通点と相違点が存続しています。共通点としては、言語学と文学研究の長い伝統、相違点としては、旧体制との継続性の問題が挙げられます。チェコも、ポーランドも、長く強い言語学研究を誇って、そのおかげで日本語学や日本文学の面で、優秀な成績を見せ、西欧における日本研究と肩を並べることができる一方で、中央における政治的変動が主な原因で、近現代の日本社会関係研究には、展開の余地がより大きいと言えます。

研究と教育の役割を兼ねる大学の展望を考えるに当たり、学生の関心の有様も念頭において、益々拡大する労働市場における学生の実力の保証を目指すのも、研究者の仕事の重要な側面をなしています。

中欧での日本研究の関心のあり方と学生の関心

現代の中欧諸国における日本研究の現状について述べる際に、その歴史的、または文化的な背景に、ごく簡単な形で触れることは現状理解の役に立つでしょう。一口で中欧と言っても一ここでは、チェコ、ポーランド、スロバキアとハンガリーの4カ国のことを言うのですが—国民国家の形成時期にできてきた文化的な伝統と、

政治的な変動は、それぞれ独特な発展を辿ってきました。ロシアと粘り強くたたかって、自己主権を取り戻そうとしていたポーランド、ドイツ民族と共存のパターンを模索していたチェコ、ハンガリーの支配下から徐々に目覚めていったスロバキア、そして19世紀に非ドイツ民族として初めて政治的に独立したハンガリー、など多彩なストーリーが残っています。それは、100年以上前のことでも、日本研究の現状とは決して無関係な史実ではなく、文化的な遺産として、段々消えていくとはいえ、存続してもいます。この発表では、主に、チェコとポーランドに焦点を当て、日本研究の現状と課題を紹介したいと思います。

チェコ

全中欧地域における日本研究の現状について述べると、最初に、研究施設、機関に簡単に触れておかなければならないように思います。日本研究が実施している施設の種類の、教育施設、研究施設（科学アカデミーの様々な所属機関）と博物館、美術館、伝統的には三種類あります。その中心的な存在は大学であるといっても、分野、国の様々な状況によって、逆に美術館、博物館、研究所などが中心である場合もあります。以下は、大学だけにおける日本研究に限って、紹介いたします。

チェコにしても、ポーランドにしても、日本研究の現状と課題について話すに当たって、先ずどこまで遡ればいいのか、という問題が出てきますが、両国の場合、それは、おそらく、1960

* チェコ・カレル大学助教授

年代のころだろうと思われます。チェコにおいては、既に戦前の時期に、日本研究がその根をおろし始めたとしても、狭義の日本研究 (Japanologie) ができてきたのは、共産党政権の緩和を目撃した、あの60年代のころです。当時の、日本研究を行っていたアカデミックな施設の中の指導的な役割を果たしていたのは、カレル大学の日本学科で、そこでは、1952年からほとんど30年間、日本学者を育成して、幅広く活躍していたのは、Miroslav Novak 教授 (1924-82) でした。彼の研究の広い範囲から最重要なトピックと作品だけを抜粋しておく、「俳句における音便 (音調)」、私小説、「禅の研究」、文化の比較学、(コンピュータによる) 日本語シンタックス (統語論) の分析など等、文学作品のチェコ語訳としては、松尾芭蕉「奥の細道」、能楽の翻訳集、井原西鶴の「好色五人女」、安部公房の「砂の女」、吉田兼好の「徒然草」が挙げられます。

優れた研究者だけでなく、カリスマ的な先生としても尊敬され、特に60年代と70年代のはじめごろ、優秀な日本文学者、言語学者の2-3世代を育成しました。いわゆるプラハの春の後、彼は、亡命することも、政権側の上司からの助教授への昇進の提供も、両方拒否し続けていて、人格、誠実の模範としても、今でも、関係者の皆の記憶に残っています。それこそ、1982年の彼の突然死は、チェコにおける日本研究の存続にとって、いかに深刻であったかが、明白でしょう。教材としては、「日本語文法ⅠとⅡ」、「日本の文学ⅠとⅡ」(Ⅱは、共著として)、また共著として「中国、日本と朝鮮の文字の入門」という教科書を残して、今でも、基本的な教材とされています。

その弟子の何人かが亡命して、イギリス、オーストラリアなどで、国際的な名声を博しました。例えば、1 コンピューターによる翻訳で有名な Jiri Jelinek、2 日本語教授法、日本語の音韻論、

社会言語学者の父の一人として知られている Jiri Neustupny、3 プラハ言語学派の伝統を基に、日本語の理論を研究している Karel Fiala、現在のカレル大学の日本学科主任で、日本語と日本文学を担当する Zdenka Svarcova などなどが、その世代の一番顕著な人物として挙げられます。

なぜ、日本文学がチェコにおける日本研究の主流になっているのか、それを裏付けるため、Novak 先生のことを少し詳しく紹介しました。

彼のそばに、年齢の10年下で、日本史を長い間担当していた Zdenka Vasiljevo (1935-2004) も、ピロード革命前の日本研究に、Novak 氏と対照的な形で、見逃せない足跡を残しました。その著書の「日本の政治発展、1868-1952」、主要作の「日本史」などを讀むと、それを貫くマルクス主義的見解や世界観が強く見受けられます。著者の Vasiljevo 先生の後継者と弟子として、ここでの評価を遠慮したいのですが、受け継ぐところは、テーマとしても、方法論としても、ほとんどなにもない、と指摘したいだけに止めます。例えば、その「日本史」(1986年) は、当時としては、まともな本で、ページ数で、500ページを超えて、日本史関係の文献の細かい紹介、人名索引、用語索引など、歴史書として、中国学科、朝鮮学科から比べて言えば、羨望の的ではありましたが、史実上、間違いがほとんどなくても、明治維新以降の記述は、階級闘争という概念を中心軸に書いてあって、そこに出てくる近代日本像は、あまり納得のいかない形になっています。Vasiljevo 先生の研究対象は、1930年代の日本のファシズム論で、そのイデオロギー的な色彩は、それほど濃いものです。

政治的な理由で、カレル大学の日本学科から直接追い出され、また退職させられた学者も、少なくとも二人について言及しなければならないと思います。

1960年代の終わりごろ、日本学科に、Winkel-

hoferova 先生（1932年生まれ）が入って、日本文学者として活躍していましたが、1970年に発足した、いわゆる「正常化過程」の犠牲者として、早く辞めさせられ、後ほど、多作の翻訳者として、名をはせました。チェコの読者に紹介した数多くの作品と作者の中から選びますと、谷崎潤一郎（細雪、作品集）、川端康成「伊豆の踊り子」、太宰治「斜陽」、志賀直哉（作品集）、大江健三郎「遅れてきた青年」、安部公房「他人の顔」、水上勉、北杜夫などなどでした。

二人目の学者は、現在、福井県立大学に勤めている Fiala 先生です。プラハ言語学派という学派から出発して、1970年に博士論文を提出して、博士号を獲得してまもなく、退職させられ、チェコ科学アカデミーの所属期間の「東洋研究所」に席を移しました。革命直後しばらくの間、カレル大学の日本学科に入って、学科主任を務めました。後ほど福井県に移住しました。その後も、カレル大学の日本学科と可能な限り協力してくださっています。膨大な研究一覧の中から一番代表的な著書だけを挙げてみると、

1972年、モノグラフ “Bi-planic Approach to Japanese Semantics” 『二レベルに跨る日本語の意味分析』。

カレル大学の大学院後期課程（言語学）と京都大学大学院の後期課程（国語学国文学）を修了して、1981年、『日本語における文の連結と文章の叙述内容の線形化』を提出し、文学博士号相当の資格を取得。1985年以降、テキスト言語学法により『平家物語』成立の研究を進め、幅広く発表しています。

2000年、著書『日本語の統語構造と情報構造』の中で『万葉集』をはじめ、広範囲にわたって日本語の構文と文章展開の共時的・通時的側面に取り組み、特に係り結びの成立問題を吟味して、複数の国際会議の論集・EAJS の国際会議においても、係助詞・連体助詞の使用について発表しました。

チェコ日本交流に関しては、1993年の論文「チェコ日本初期交流史」と、1995年、『異文化との出会い』に投稿。

現在進行の研究企画は1)『チェコ語・日本語語順コーパスの作成とそのチェコ語語順コーパスとの対比』と2)『スラヴ文化の交差と越境』（同志社大学）。

長編文学作品の翻訳—

1993年『平家物語』チェコ語全訳注釈。

1994年『新古今和歌集』第五巻「恋の歌」共訳。

2002年『源氏物語』チェコ語全訳Ⅰ., 2005『源氏物語』Ⅱ. (全4巻予定)

チェコ語訳されたものに、1999年美智子皇后著『はじめての山のぼり』と2001年『橋をかける』、中世の和歌や川柳、太宰治と大江健三郎の短編、宮沢賢治、高村光太郎、俵万智の詩等、日本語訳にはクンデラ、ハヴェルのエッセー等があります。

1993年に、チェコの東のほうの、Olomouc 市の Palacky (パラツキー) 大学で、日本学科が設立され、現代日本語の教育を中心に、日本文学、日本史と日本社会についての講義も提供しています。現在の日本語学科（正確には「日本語言語学」）は、一年おきに新一年生を受け入れるようになっていて、入学志願者（特に隣国のスロバキアから）が徐々に増えています。現在、80人前後の学生が在籍しています。何人かの専任講師に日本語の講師もついていますし、学生交換と交流先は、学習院女子大学、北海道大学、早稲田大学などです。

ポーランド

ポーランドも、チェコと同様に、20世紀に入って、国民の文化形成過程が、その最終段階に及んだところで、日本の文化との最初の接触が起きました。それは、歌舞伎の曲を演奏した「カワカミ・サダヤッコ」をスターとする「川上劇

団」の欧州旅行がきっかけで、日本に対する興味がそそられたのです。日本文学の最初の翻訳が出てきて（当時はドイツ語経由）、1901年に、Adolf Swiecicki 氏の「日本文学史」という、最初の研究書も発行されました。最初期の親日時代の頂点と呼ばれているのは、日露戦争の時期で、ロシアの敗北は、かねての狙いとしていた母国の独立という視点から、大いに歓迎されたのは、いうまでもありません。

戦前と戦争直後の時代をスキップして、現状との直接の連続性が見出せるところまで遡ります。戦後の日本研究の歴史と不可分に結びついている名前は、Wieslaw Kotanski 教授です。彼の努力と実力で、1956年に、ワルシャワ大学における日本研究が専攻として独立しました。氏の最初からの興味は、日本文学とその翻訳のことで、何より有名なのは、彼による「古事記」のポーランド語訳と、『万葉集』という古典作品のアンソロジーのことで、翻訳活動のほかに、日本語学、特に文体論、語源論、日本宗教論、美術、などなどが挙げられます。Kotanski 先生は現代まで活躍していて、ポーランドでは、日本文明の長老、最高権威者、と高く評価されていて、ワルシャワ大学の名誉教授になっています。

チェコと違って、既に1960年代以降、日本から日本語講師がワルシャワ大学に連続的に派遣され、その講師の方々は、ただ日本語の教育だけでなく、ポーランドの文学作品の和訳も出していました（Yonekawa Kazuo, Kudou Yukio）。そして、1970年代の半ばごろ、東京大学との協定締結と、国際交流基金の支援国のリストへの加入のことを元に、ワルシャワ大学への日本人の客員教授の長期間派遣だけでなく、言語学、日本文学、日本史という3つの専攻において、日本への大学院生の派遣までに、日本側からの支援は幅広く拡大していきました。

Kotanski 教授一人だけでなく、日本文学、日

本史の専門それ自体でも、1970年代からの継続性が維持されてきました。Mikolaj Melanowicz 教授は、1976年に助教授になって、日本文学史の教材、翻訳を続出していて、その中の代表的なものだけを挙げると、『日本文学。6世紀から19世紀半ばまで。散文の編』、『日本文学・20世紀の散文』、『日本文学20世紀の詩』になります。翻訳は、夏目漱石、芥川龍之介、川端康成、井伏鱒二、谷崎潤一郎、大江健三郎などなど。Melanowicz 教授は、翻訳者として、現在、第一人者とされているのです。歴史の分野においても、Jolanta Tubielewicz 教授は、1980年に助教授に指名され、後に Melanowicz 氏とともに、ポーランドの大統領に教授に任命されました。日本の古代史と考古学が専門で、『日本考古学の謎』、『日本の文化』、『日本史』、『日本の神話』などの著書を出版しています。

ワルシャワ大学のスタッフは、16人なので、全員の名前と成績をあげるわけにはいかないのですが、後3人だけを紹介したいと思います。

Ewa Palasz-Rutkowska 教授は、日本の近代史を専攻にして、真崎甚三郎大将と皇道派について研究していますし、最近、『ポーランド・日本交流史、1904-1945』、『ポーランドに対する日本の外交、1918-1941』、『20世紀初めのポーランドにおける日本像』などを出しました。

Romuald Huszcza 教授は、語用論 (pragmatics)、敬語、意味論 (semantics) について研究をしています。

Agnieszka Kozyra 博士は、日本宗教史と日本の近代思想を研究して、内村鑑三の無教会主義とか、西田幾太郎の思想、禅について研究書を出しています。

1980年代における日本学科の著しい発展を元に、1991年には、日本学科のスタッフと東京大学の Yoshigami 先生（ポーランドとスラブ言語学専攻）の努力で、「Polish Japanese Studies Foundation」と「高島基金」という基金を設立して、

それで日本学科の図書館への寄贈などがより円滑にできるようになって、現時点では2万冊以上の図書所蔵を誇ります。日本学科では、2年ごとに、「Japonica」という紀要を出して、日本文明についての学術記事、文学作品の翻訳を掲載しています。

ポーランドにおける日本研究の進行状況の一番客観的な注目点は、国際会議への参加と開催のことでしょう。2003年8月27-31日の間、EAJIS（欧州日本研究協会）の会議が開催され、8つのセクションにおける発表とパネル・ディスカッションが実施されました。

ポーランドにおける日本研究は、決して、ワルシャワ大学だけに限るわけではありません。1987年に、Krakow市のJagiellonian大学の「東洋言語学研究所」で日本学科が設立され、同年、Poznan市のAdam Mickiewicz大学の「東亜学科」において日本学科が設立され、Torun市にも、日本学科が設立されています。

ハンガリー

ハンガリーの日本研究は、情報が一番少ないので、それほど詳細に記述することができません。社会主義時代の状態は、資料が入手しにくいので、省かせていただきます。1991年3月27日に、ハンガリーの日本学者の総合会議が開催され、ハンガリーにおける日本研究の状態の評価とその課題を広く検討しました。

要約させていただきますと、伝統、権威のある施設でも、日本研究の存在は割合と短く、その中のブダペストにあるELTE大学でも、日本学科が設立されたのは、1986年のことで、有名な「貿易カレッジ」も、それより2年先になりますが、そこは、主に日本語と日本文化の講座が中心になっています。その一方、ハンガリーには、大学と研究所とは、つまり教育と研究とは、はっきりと分かれていて、日本研究は、それぞれの個別の研究所で活躍している研究者に

よる形が主流で、分野別に進行していて、その中心は経済学と社会学と政治学、そして言語学の研究もあります。そういう散在的な状態を乗り越えるために、1995年には、Japan Federation in Hungary、「ハンガリーにおける日本連盟」という傘下組織が設立されて、情報交換、日本関係の情報、資料のデータベース作成を委託されました。

あくまでも著者の主観的な観察かもしれませんが、ハンガリーにおける日本研究の特徴は、学術的な関心は、それぞれの研究、教育的期間に散在していて、教育活動がそれほど重視されない一方、ハンガリーの外交方針上、日本はかなり上位を占めているようです。その結果として、国際交流基金の事務所の拠点は、ブダペストに置かれていますし、上記の「ハンガリーにおける日本連盟」も設立されるようになりました。

スロバキア

最後になりましたが、スロバキアにおける日本研究についても、触れておきたいと思います。最初の日本語講座が開かれたのは、1986年でしたが、それは、独立した学科ではなく、英米文学学科の一科目として発足しました。1992年、日本政府のODA無償のLL教室の機材の寄贈がきっかけとなって、1994年に、Komensky（コメンスキー）大学では、ようやく独立した学科が設立しました。当初から日本語と日本文学が専攻となったのは、いうまでもないことでしょう。若いスタッフの方々は、国際交流基金の北浦和にある日本語研修センターにおいて、日本語教授法の研修を受けて、日本語教育の概念を徐々に改善しています。人材にも機材にも制限がありますので、新一年生は、6年ごと受け入れられています。

チェコにおける日本研究の現状と課題

教育の現状

1999年に、欧州連合の加盟国の大学教育制度の統合を目指している、いわゆる「ボローニャ宣言」が公表されました。その一環として、それぞれの国における高等教育制度の基準化を進め、学位通用性の確保と比較可能な学位システムの導入などを目的とし、ボローニャプロセスが進行中です。その関係でチェコの文部省は、各大学における各科目のカリキュラムの再認定過程を発足させ、学士課程、修士課程、博士課程の、それぞれの内容の充実化、区画化を実施しようとしています。

中欧においては、大学教育とは、4年間か5年間かかるという伝統的な根強いイメージが普及していますので、学士号で大学を卒業するのは、特別な理由があるほか、退学なのか、とみなされてきたのです。そのため、学士号と修士号の格差がそれほどはっきり認識されなかったのですが、しかし上記の三つの大きな理由で高等教育の統合と通用性が政治的な課題とされるようになって、大規模な大学教育改革がそういう固定観念を覆すでしょう。

カレル大学哲学部の日本学科においても、企画してきた新規学士課程のカリキュラムをきめ細かく記述、解説して、文部省に提出して、文部省がそれを審査して、学科のカリキュラムとして認定しました。現時点では、新一年生に対して、既に、この3年間にわたる新規学士課程を実施していますが、上級の学生には、旧修士課程を受けさせながら、卒業させます。が、その旧学士課程の採用期限は、2007年10月までですので、十分事前に、新しい修士課程の認定の手続きを経なければなりません。

新しい3年間の学士課程の要点は、日本語授業を中心に、より簡単な形で、日本文学、日本史、日本文化と日本現代社会の講義やゼミを実

施することで、その過程につながる修士課程（「M.A. コース」ともよんでいます）は、学生が日本語と日本文学、それとも現代社会と日本史という二つの専攻から一つを選択して、勉強する形をとります。この修士課程の重点は、それぞれの専攻の卒業論文の準備と執筆ですので、言語教育を中心にする学士課程との格差が明らかでしょう。

学生数ですが、受け入れた年によってかなり変動がありましたが、平均として、15-20人になっていて、現行学年の新一年生数は、29人に急増しました。入学した学生は、卒業するまで皆同じカリキュラムを受けなければなりません、大体3年生になってから、日本語、日本文学、日本史、日本社会、という4つの専攻から一つを選んで、卒業論文を提出しなければならないようになっていきます。勉強期間は、平均で6、7年間かかります。

大学院まで進学したい学生は徐々に増えていて、現在、大学院生として登録している人数は、10人以内ですが、増加傾向にありますし、他のチェコの大学からの希望者も出てきています。博士論文のテーマは、例えば「村上春樹の小説における「私と環境」」、「20世紀初めの日本と東南アジアの外交」、「日本語のアスペクト」、「谷崎潤一郎の作品における狐の象徴論」、「井伏鱒二の作品の特徴と文の構成」、「三島由紀夫の作品における思考と言語の関係」などです。

研究の現状

日本学科で最大の課題としているのは、教育上も、研究上も、日本語、日本文学、日本史、それぞれの分野に分かれていた従来の日本研究のモデルから、もっと学際的、就職の現状により適合したモデルへ移行することは学科スタッフとして一致しています。具体的な例を挙げるなら、例えば日本語授業の総合化、つまり、文法、会話、文字（漢字）の学習の同期化を目指

しています。また、エラスムスという、欧州圏内の人物交流推進を図るプログラムで、カレル大学から教員の派遣、学生の交換を中東欧と発足する予定です。それと同時に哲学部では、いわゆる大規模な「研究プロジェクト」という研究振興活動が実施中で、その一環として、日本学科においては、日本語チェコ語辞典のデータベースの準備を進めています。

2004年、カレル大学の社会科学学部において、現代東亜と太平洋地域の研究を図るアジア研究学科が設立されました。中には、日本を研究の対象とする学科もあって、日本史などの講座を実施するため、うちの学科のスタッフを派遣する提携が行われています。

現在、4人の専任教員と日本語講師一人と、兼任講師一人と、大学院生の2人は、教員の構成となっています。それぞれの教員の研究を紹介するのが不可能ですが、研究の場の言及だけに止めたいと思います。

Zdenka Svarcova (シュワルツォヴァー) 助教授は学科主任を務めて、日本語文法と近代文学を専攻にしています。研究トピックが豊富で、幸田露伴、太宰治、谷崎潤一郎の作品の研究と比較をしています。カリキュラムには、日本語の理論、文法、詩人について詩における言語像の研究、日本文学、日本文化という主な講義の担当となっています。

Jan Sykora (スィーコラ) 博士は、現代日本社会と徳川商人の思想を研究していて、最近、三井高房の『町人考見録』のチェコ語訳を出版しました。現代日本社会、日本の文字体系、日本経済の仕組みの授業を担当しています。

David Labus (ラプス) 博士は、幕末の政治史と思想史を専攻に、現在、横井小楠の思想を研究しています。日本史、近世の文書の読解、会話の日本語などの授業を行っています。

Martin Tirala (ティララ) は、平安文学と古典語の研究をして、博士課程で、竹取物語と伊

勢物語のチェコ語訳をしています。文語、日本文学、会話の日本語を教えています。

教材作成

体制が変わってから、日本学科の新しいスタッフの優先順位が一番高かった課題の一つとしては、教材の作成のことでした。基本的なテキスト「日本語文法」とか、「日本文学」などはありませんでしたが、会話の日本語とか、日本事情とか、日本史など、不足していたほうが多かったのです。機材の整備、人材の整備、国際交流基金からの援助(サポート)など、様々な面が改善していく次第、教材作成の条件も段々広がっていきました。国際交流基金の最初の講師の派遣(1991年)をきっかけに、既に1993年ごろ、『日本語会話集』という教材ができて、その自習者むけのバージョンも作成されました。当時、ワードプロセッサを初めて利用して作ったので、なかなか画期的な事業とされていましたが、すでに品切れになってしまっていて、現時点からみると、コンピュータではなく、単なるワードプロセッサだけでできているので、その再版に必要なデータ変換が問題となっています。

引き続いて、日本語概説の新しい教科書もできて一渡辺実先生の『日本語概説』のチェコ語訳一、そして、2000年に、『漢チェコ語学習字典』も完成しました。字母は、常用漢字に222人名用字にして、2千ちょっとの親字を収録した字典となっています。2005年の5月に、再版が発行されました。そのほか、『近代日本史年表と要覧』を作成しているところです。2005年に、学科主任の Zdenka Svarcova 氏が300ページの『日本文学、712—1868』という、日本文学史と人名、用語索引から構成される図書を発行しました。

海外交流

海外交流は、現在、研究そのものの発達に全く不可欠とされていますが、それは、おそらく、旧体制下の日本研究と一番対照的な側面だろうと思われます。現代の日本学科の交流範囲は、国際交流基金からの多面的な支援（学科のスタッフのフェローシッププログラムから図書取得助成まで）、日本の文部科学省の奨学金、学生の私費の旅行、提携している日本大学への留学など、それらの形が段々多様化していきます。

先ず学部生の留学からいうと、文部科学省か、国際交流基金か、学生交換協定のある大学（お茶の水女子大学をはじめとして、東京外国語大学、金沢大学、同志社大学など）への留学が一番多いですが、そのほかにアルバイトしながら勉強するという形もあります。留学期間は数週間から1年間まで、となります。学生が自由に応募できる滞在の提供と、我々教員が学生の論文執筆上の必要性から判断して推薦する、基本的にそういうパターンがあります。5年間の勉強のうちに、努力さえすれば、学習成績が平均、またその上の学生のほとんどが、日本に行くことができるようになっていきますので、留学の見通しは、大きな刺激です。大学院（博士課程）に入ると、留学のチャンスが更に広がり、大学院生という資格から、国際交流基金の様々なプログラムに申請できるようになります。

人物交流とは、学生の派遣だけでなく、客員教授の招聘も実施しています。ここ数年、原則として一年おき、短期滞在でも、一学期にわたってでも、主に日本文学の専攻の一人の教授を招くことができるようになっていきます。それも、これまでの、基本的に国際交流基金の援助によるところですが、それだけでなく、例えば短期集中講義の場合は、ほかの方法も目指していま

す。客員教授に指導していただく授業は、不定期的ではありますが、また非常に有意義な授業となっています。1994年以降は、学芸大学の小池正胤先生、トロント大学のLiman先生、渡辺実先生、金沢大学の木越治先生、大阪大学の三谷研爾先生などの名前が挙げられます。日本文化という上級ゼミを持っていたいたり、論文の指導の面でも、お世話になっています。そのほか、一、二週間の集中講義も時々行われ、原則として私費で教えてくださる先生もいて、最近、3回ほど、お茶の水女子大学の小風先生にも、そういう意味で、大変お世話になりました。

このところで、もう一言言及しておかなければならないと思います。3年ほど前に、国際交流基金の援助で、Liman先生に企画された、日本映画の上映の講座が行われて、大人気になりました。異文化を伝えるために、口頭の形だけでなく、聞きながら見る、という形がいかに重要なのか、また実感しました。

日本学科では、2-3年間に一回ほど、小規模な会議を開催するようになっていきますので、そういう面でも、日本の先生方の参加をいただくことも通例になっています。

最近開かれた会議については、資料1をご参照ください。

資料

データと人名は、主にEAJSの紀要による。

(Bulletin of the European Association for Japanese Studies)

Bulletin 44 (Jan 1997) Japanese Studies in Hungary

Bulletin 48 (June 1998) Japanese Studies at Charles University

Bulletin 54 (June 2000) Japanese Studies in Poland

Bulletin 67 (October 2004) Japanese Studies in Slovakia

資料1

カレル大学における研究の紹介

会議のリスト

2004年3月18日

Globalization and Regionalism in East Central Europe and East Asia: Comparison

Jan Sykora *Japan Between Globalization and Localization: How Japan Should Respond to the Global Trends*

* * *

2002年9月23-24日

谷崎潤一郎セミナーおよび日本詩歌の時空間共同研究

(Seasons and Places in Japanese Poetry Research Workshop)

参加者と発表

名誉ゲスト 渡辺千萬子氏

鈴木登美 谷崎の作品におけるジャンルとジェンダー

千葉俊二 日本文学の中の谷崎潤一郎

Anthony Liman Tanizaki Junichirō in World Literature

Haruo Shirane 日本詩歌の時空間, 共同研究会 Seasonal Words, Seasonal Topics, Poetic Places, etc. (Research Workshop)

Zdenka Svarcova 谷崎潤一郎の作品における抜かりのないこととしての異文化: 「幸子の夢の一例」

* * *

2001年5月26日-6月1日

“JAPANESE LANGUAGE —

INSTRUCTION, ANALYSIS AND THE CULTURAL BACKGROUND”

Session 1 *Language Instruction and Linguistic Theory*

Hidehiro MURAOKA (Chiba University):

Learning Strategies and Japanese Language Instruction

Session 2 *Contrastive Studies of Japanese and Other Languages*

Masaru INOUE (Kokuritsu Kokugo Kenkyusho):

Contrastive Study of the Tense and Aspect in Japanese, Korean and Chinese

Session 3 *Linguistic Approaches to Diachronic Tasks*

Satoshi KINSUI (Osaka University):

Japanese Studies of the Japanese Language-a Historical Overview

Takashi NOMURA (Tokyo University):

A Contrastive Approach to Classical and Modern Japanese Grammar

PANEL SESSION : *Japanese Language-Approaches to the Concept of its Cultural Background*

Karel FIALA (Fukui Pref. University):

Attempts at a Cognitive Explanation of the System of Kakari and Rentai Particles in Early Classical Japanese

Andrej BEKES (University of Ljubljana)

The WA Topic and the Content Structure of the Text

Romuald HUSZCZA (Warsaw University)

The Sino-Japanese Component of the Modern Japanese System-Grammaticalization vs. Lexicalization

Kazuhiro IWAZAWA (Japan Foundation, Budapest Office)

Teaching Japanese by Japanese in Central Europe

* * *

2000年 7 月26－27日

A New Dialogue Between Central Europe and Japan:

A Tension Between Continuity and Change.

Charles University, Institute of East Asian Studies

* * *

The Traditional Japanese Thought and the Present, 1996

Tradition and Modern in Japanese Literature and Language, 1993

資料2

カレル大学日本学科のカリキュラム
 現行の日本学科のカリキュラム（1週間当たり）
 （現時点、4年生だけに適用しています）

1年生

日本語の授業	12時間
日本事情	2時間
選択講義	2時間

2年生

日本語	10時間
近代文学	3時間
日本社会	2時間
日本事情ゼミ	2時間

3年生

日本語	8時間
文語	2時間
古典文学と前近代文学	3時間
日本史（明治維新まで）	3時間
日本研究のゼミ	2時間

4年生

日本語	8時間
文語	2時間
近代日本史	3時間
選択講義	2時間

5年生

日本語	4時間
東亜思想史	2時間
日本経済の仕組み	2時間

新規の学士課程のカリキュラム

101	日本社会	2/1単位	2/1試験
102	日本の文字	2/-試験	
103	日本語文法Ⅰ	1/1単位	2/-試験
104	会話Ⅰ	-/2試験	
105	文字（練習）Ⅰ	-/2単位	-/2単位
106	聴解練習Ⅰ	-/2単位	-/2単位
107	翻訳の入門Ⅰ		-/2試験
108	日本語の練習	-/2単位	-/2単位
109	選択のゼミⅠ*	-/2単位	-/2単位
110	日本史	2/1単位	2/1試験
111	日本語文法Ⅱ	1/1単位	2/-試験
112	会話Ⅱ	-/2単位	-/2単位
113	文字（練習）Ⅱ	-/2単位	-/2単位
114	聴解Ⅱ	-/2単位	-/2単位
115	翻訳の入門Ⅱ		-/2試験
116	日本研究のゼミⅠ	-/2単位	
117	一般言語学入門		2/-試験
118	選択のゼミⅡ*	-/2単位	-/2単位
119	日本文学	2/1単位	2/1試験
120	翻訳のゼミ	-/2単位	
121	通訳練習		-/2試験
122	日本語Ⅰ	2/-単位	2/-試験
123	日本研究のゼミⅡ	-/2単位	
124	作文作成		-/2単位
125	選択講義Ⅰ	2/-	2/-試験
126	東亜の思想	2/-	2/-試験